

プラトン『国家』篇における数学の対象

浅 野 幸 治

数学の哲学でプラトン主義と言え、数学の関わる対象が人間の思考とは独立に客観的に存在し、数学的知識とは数学の対象についての真理を発見することにあるとする見方である。「プラトン主義」という言葉が既に示唆しているように、プラトン自身も、この点に関してプラトン主義者である。ここで、プラトン研究にとっては、数学的知識の関わる数学の対象とプラトンのイデア論との関係、特にプラトンが数学の対象をイデアであると考えたのかそれともイデアとは別であると考えたのか、が問題となる。プラトンのイデア論が倫理的なイデア（例えば、美のイデアや正義のイデア）だけではなく数学的なイデア（例えば、三角形のイデアや2のイデア）も要請することには、ほとんど疑いの余地がない。もしプラトンが数学の対象が数学的なイデアとは別のものだと考えたのであれば、プラトンは、数学の対象と数学的なイデアとの間に重要な違いを認めたことになる。この「重要な違い」については、例えばウィルソンが、プラトンのイデア論を普遍 (Universals) 理論として理解した上で、数学の対象が数学的な演算や作図の対象であるのに対して数学的なイデアは例えば2性や円性であり演算や作図にはなじまないと述べている⁽¹⁾。

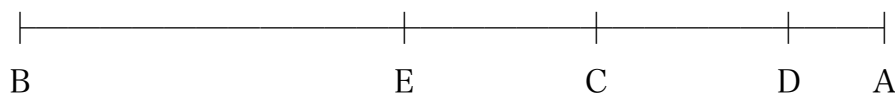
多くのプラトン研究者は、アリストテレスの証言に従って、最後期のプラトンないしは初期のアカデメイアには数学的中間物⁽²⁾（感覚的事物でもイデアでもない中間のもの）という思想があったと考える。解釈者の間で意見が分かれるのは、主として、プラトン中期の代表作である『国家』篇においてプラトンが数学の対象についてどういう考えを持っていたのか、という点である。そこで、本論文でも上記の問題を『国家』篇に焦点を絞って考察したい⁽³⁾。この問題に対して伝統的な解釈⁽⁴⁾は数学の対象は数学的中間物であると答えるが、本論文は、数学的中間物という考えがプラトンのイデア論にとって当然の帰結であることをこれまで触れられていな

かった新たな視点から論じることによって、伝統的な解釈を擁護することを目的とする。

数学の対象は何かという問題は『国家』篇の中でも特に第六卷末尾（509d1-511e5）にある線分の比喩と密接に関係するので、本論文もまず線分の比喩の検討から始める。

一、線分の比喩とその問題点

線分の比喩とは、線分ABをまずその線上のある点Cで二つの等しくない部分ACとCBに分割し、更にACとCBのそれぞれを今と同じ比率で分割するというものである。こうして、ACはADとDCに分割され、CBはCEとEBに分割される（509d6-8）。



この時、ACは目に見える対象（思わくの対象）を、CBは知られる対象（知識の対象）を表し、更にDCは我々の周りの動物、植物、その他（感覚的事物）を、ADはそれらの影、水面その他に映った像などを表すとされる（509e1-510a6）。線分の比喩の一つの要点は、

$$AD : DC :: AC : CB$$

即ち対象が真実に与る程度において、感覚的事物の似像とその原物である感覚的事物との関係が思わくの対象と知識の対象との関係に等しいということである（510a8-b1）。また、CEとEBも同じ比率で分割されているので、

$$AD : DC :: CE : EB$$

という関係も成り立ち、CEの部分にある対象とEBの部分にある対象との関係も似像とその原物というような関係であることが解る。

さて、プラトンは、線分のAD、DC、CE、EBに対応する認識に対して、それぞれエイカシア (eikasia)、ピステイス (pistis)、ディアノイア (dianoia)、ノエーシス (noesis) という名前を与えている (511d6-e2)。エイカシアの対象が感覚的事物の似像であり、ピステイスの対象が感覚的事物であり、ノエーシスの対象がイデアである (510b8-9、511c1-2) ことは、プラトンが明確に述べており、解釈者の意見も一致している。しかし、ディアノイアの対象が何であるかについては、プラトン自身がはっきりとは述べておらず、解釈者の意見が分かれている。ディアノイアの対象をめぐる解釈は、二種類に大別できる。第一の種類は伝統的な解釈であり、ディアノイアの対象は数学的中間物であるとする。第二の種類は、ディアノイアの対象をイデアであるとする解釈で⁽⁵⁾、この解釈は更にいくつかに区別することができるが、すべて (伝統的な解釈と対立するので) 近代的な解釈と呼ぶことにする⁽⁶⁾。これらの解釈について論じる前に、以下のこの節では、ディアノイアの対象をめぐる解釈上の主要な問題点を二つ簡単に整理しておく。

まず、プラトンがディアノイアの例として挙げているのは算術、幾何学などの数学的学問だけであるが、数学はディアノイアの典型的な例として数学以外の認識をも含めたディアノイア一般を代表するのか⁽⁷⁾、それともディアノイアの範囲は数学に限定されるのか、という問題がある。この問題については、数学の対象以外にディアノイアの対象があってもなくても、少なくとも数学の対象がディアノイアの対象であることは確かである。従って、本論文では、ディアノイアの対象が正確に何であるかという問いについては判断を控え、数学の対象は何かという問いの立て方をする。

次に、エイカシアは似像を見ている状態であるが、それには原物に気が付いている場合と気が付いていない場合とが考えられる⁽⁸⁾。原物に気が付いていれば、似像が原物の似像として原物について教えてくれるものであることを知っているので、

似像を通して原物を「推測」していると言うことができるし、原物に気が付いていなければ、似像が似像であることを知っていないので、似像のことを本物であると「盲信」していると言うことができる。それに応じて、ディアノイアの対象（CE）とノエーシスの対象（EB）との間にも似像と原物という関係が成り立っているので、ディアノイアも「推測」である可能性と「盲信」である可能性とが考えられる。この問題については後で論じることになるが⁽⁹⁾、今のところは判断を控え、数学の対象がアイデアの似像であることだけを確認しておく。

二、数学的中間物と伝統的解釈

既に述べたように、伝統的な解釈によれば、プラトンは数学の対象が数学的中間物だと考えたのであるが、この「数学的中間物」という表現はアリストテレスに由来する。そこでこの節では、まず「数学的中間物」とは何かをアリストテレスによって説明する。

アリストテレスは『形而上学』987b14-18において、プラトンが「感覚的事物とアイデアとのほかに、これら両者の中間に、数学の対象たる事物が存在すると主張した」⁽¹⁰⁾ことを伝えているが、そこでのアリストテレスの説明によれば、数学的中間物は永遠的・不変不動的である点で感覚的事物と異なり（言い換えれば、アイデアと同じであり）、複数個存在する点でアイデアと異なる（言い換えれば、感覚的事物と同じである）。言うまでもなく、アイデアは「それぞれそれ自らは唯一単独である」。

では、どうして数学の対象はアイデアとは区別されるのか。例えば、 $2 + 2 = 4$ という数学的命題を考えてみると、そこに2が二つあることは明白である。ところが、アイデアはただ一つしか存在しないとされる。そうすると、2がもしアイデアであれば、自分（2）に自分（2）を加えるということは意味をなさないであろう。従って、 $2 + 2 = 4$ が数学の命題として有意味であるためには、そこで言及されて

いる2はアイデアではなく、同じものが複数個存在できるような性格でなければならない。

アリストテレスは、特に数学の対象である数については『形而上学』1080a21-23において「数学的の数が比較可能的（加算可能的）である」というプラトン主義者の説に言及して、「数学的の数においては、そのうちのいずれの単位も他の単位と異なっていないからである」と述べている。この説明によれば、数学者の語る数は質的に同一の単位から成り立っており、例えば、2は1と1から成り立っており、4は1と1と1と1から成り立っているので、2に1と1を加えて4にしたり4から2を引いて2にしたりと加減乗除が自由に可能である⁽¹¹⁾。

幾何学においても同様で、例えば二つの円が交差すると幾何学者が言う時、その円は唯一のアイデアではありえず、やはり複数個存在しえるような性格のものでなければならない。

以上で数学的中間物がどのようなものであるかについて一応の理解が得られたと思うので、次に、そのような数学的中間物が『国家』篇の中で述べられているかどうかを見る。

まず第一に、プラトンは『国家』篇511d2-5（および533d4-7）において、ディアノイア（数学的認識）が「哲学的認識（ノエーシス）と思わくの何か中間的なところに位置づけられる」⁽¹²⁾（511d4-5）と述べている。また、少し前では哲学的認識がアイデアを対象とすること、そして思わくが感覚的事物を対象とすることが述べられている。更に『国家』篇第五卷には、認識能力とそれが向けられる対象とそこから得られる認識との間に一対一の対応関係があり、従って得られた認識が異なればその認識対象も異なるという議論があり（477c1-478b2）、それを確証するように511e2-4には「認識状態は、その対象が真実性にあずかっているのに対応して、ちょうどそれと同じ度合いで明確性にあずかっている」と述べられている。従って、数学的認識の対象はアイデアと感覚的事物の間であるという思想が『国家』篇にもあると思われる。

では、『国家』篇の中でアイデアと感覚的事物の間であるとされる（と思われる）数学の対象とは、どのようなものであろうか。数学者の扱う対象の中でも特に数については、プラトンは次のように言っている。

その中の1はあなた方の要請するような性格のものであって、そのひとつひとつは、どれをとっても互いにまったく等しくて少しの差異もなく、それ自身の内に何ひとつ部分というものをもたないとされている。（『国家』篇526a2-4）

つまり、ここでも数学者の数は、相互に全く等しい単位から構成されていると言われており、これは、アリストテレスの伝える数学者の数と全く同じである。

アリストテレスの伝えるところによれば、アイデアが唯一的であるのに対して数学的中間物は複数個存在するが、数学的中間物の複数性に関してだけは、『国家』篇の中にプラトンの明確な言葉がない⁽¹³⁾。しかし、プラトンは、少なくとも、数学の対象とアイデアとの間に似像と原物というような関係があることは指摘している。例えば、もし数学者の語る円が円のアイデアの似像であれば、数学者の円が複数個存在することには何の不都合もないし、むしろ数学者の円は似像であるのだから複数個存在すると想定する方が自然であろう。

従って、『国家』篇の中でプラトンが考えている数学の対象は、アリストテレスが数学的中間物という呼び名で伝えるものと同一のものであると考えられる、と伝統的解釈は主張する。

三、近代的解釈の批判

伝統的解釈を取らず、アイデアと感覚的事物との間に数学的中間物と呼ばれる第三の種類の物が存在することを否定する場合には、数学の対象は何らかの意味でアイデアであるのが自然である。これが近代的解釈であるが、主なタイプとして三種類を区別することができる。第一のタイプは、コーンフォードの解釈で、ディ

アノイア（数学）の対象とノエーシスの対象の区別を数学的アイデアと道徳的アイデアとの区別と見る。第二のタイプは、クロスとウズリーに代表される恐らく最も一般的な近代的解釈で、数学の対象を善のアイデアとの関連において見られていない数学的アイデアと考える。第三のタイプは、クーパーおよびホワイトの解釈であり、これは線分の比喻の中二つの部分DCとCEが同じ長さであることを重視した非常に特異な解釈で近代的解釈に含めることができるかどうか解らないが、少なくともある意味では数学の対象は数学的アイデアであると考えてるので近代的解釈に含めて考えることにする。これらの近代的解釈を、この節では順次に検討・批判していく。

（一）、コーンフォードの解釈

まず第一に、コーンフォードの解釈は、ディアノイア（数学）の対象とノエーシスの対象の区別を数学的アイデアと道徳的アイデアとの区別と見る⁽¹⁴⁾。この解釈を単純に述べれば、「四角形そのもの」とか「対角線そのもの」（510d7-8）を認識するのが数学で、「美そのもの」や「善そのもの」（507b5）を認識するのが哲学だということになる。但しもう少し正確に言えば、数学的アイデアもノエーシスの対象になりえる⁽¹⁵⁾。では、ディアノイアとノエーシスの区別は正確には何になるのか。この点について、コーンフォードは、ディアノイアは与えられた仮定から結論を演繹する下方への思考（510b5-6, c3-d3）であるのに対してノエーシスは与えられた事柄からその前提を直観していく上方への思考であると主張する⁽¹⁶⁾。これを別の仕方と言えば、数学的アイデアは、数学者が研究・認識することもできるし（ディアノイア）、哲学者が研究・認識することもできる（ノエーシス）。更にコーンフォードは、道徳的アイデアもディアノイアの対象たりえると主張する⁽¹⁷⁾。

コーンフォードの解釈は、ディアノイアの対象とノエーシスの対象の区別を明確に認める点で正当である。しかし、コーンフォードが数学的アイデアもノエーシスの対象たりえ道徳的アイデアもディアノイアの対象たりえると主張する時、数学的アイデアと道徳的アイデアの区別は一体どういう区別になるのか。この点について、コーン

フォードは、数学的アイデアと道徳的アイデアの区別はどっちが上とか下とかいう区別ではなく、数学的アイデアの似像が目に見えるのに対して道徳的アイデアの似像は目に見えないので、数学的アイデアとその似像（例えば2のアイデアと二個のりんご）の違いの方が道徳的アイデアとその似像（例えば正義のアイデアと正しい魂）の違いよりも初心者にとって解りやすいという「教育における便宜上の区別」以上のものではない、と考える⁽¹⁸⁾。しかし、第一に、道徳的アイデアの似像が目に見えないというのは、必ずしもそうではない。確かに、コーンフォードが例に用いている人の魂は目に見えないけれども、それは道徳的アイデアの似像が目に見えないからではなく魂が目に見えないからに過ぎない。例えば、正義の行為は、税金を払うことであれ犯罪者を罰することであれ目に見える行為であるし、明らかにプラトンは、多くの美しいもの、多くのよいものは目に見えると考えている（507b2-9）。従って第二に、道徳的アイデアとその似像との違いの方が数学的アイデアとその似像との違いよりも解り難いとは言えない。もし、数学的アイデアが目に見えないのに対しその似像が目に見えることを理由として数学的アイデアとその似像との区別が容易であるとするならば、同様に道徳的アイデアが目に見えないのに対しその似像が目に見えることを理由にして道徳的アイデアとその似像との区別が容易であると主張することができるであろう。いずれの場合もアイデアは目に見えないがその似像は目に見えると言うのが（プラトンの見地にとって）正当であり、この点で数学的アイデアと道徳的アイデアの間に差異はない。最後に、数学的アイデアと道徳的アイデアとが違う種類のアイデアであることは認めるにしても、既に第一節において述べたように、ディアノイアの対象とノエシスの対象との間には似像とその原物というような関係があると思われる。ところが、コーンフォードの解釈によれば、数学的アイデアが如何なる意味において道徳的アイデアの似像であるのかが、全く明らかではない。

（二）、クロスとウズリーの解釈

次に検討するクロスとウズリーの解釈は、ディアノイアの対象（従って数学の

対象) がノエーシスの対象の似像であるとされる点を尊重する。この解釈によれば、ノエーシスの対象とディアノイアの対象の区別は道徳的アイデアと数学的アイデアというような領域の区別ではなく、道徳的であると数学的であるとの拘わらず一般にアイデアがノエーシスの対象でありまたディアノイアの対象でもある。では、ノエーシスの対象であるアイデアとディアノイアの対象であるアイデアはどう違うのか。クロスとウズリーは、ノエーシスの対象は善のアイデアとの関連において見られたアイデアであるのに対してディアノイアの対象は善のアイデアとの関連において見られていないアイデアであると考える⁽¹⁹⁾。例えば数学的アイデアについて言うと、数学者の認識の対象は数学的アイデアであるが、数学者は数学的アイデアを善のアイデアにまで遡って理解することをしないので、数学者のしている数学的アイデアの姿は不完全・断片的である。それに対し、哲学者は、数学的アイデアを善のアイデアにまで遡って善のアイデアとの関連において理解するので哲学者の見る数学的アイデアは完全である⁽²⁰⁾。このような意味において、クロスとウズリーは、ディアノイアの対象とノエーシスの対象とが共にアイデアでありながら両者は似像と原物というような関係によって区別されると考える。

クロスとウズリーの解釈は、ディアノイアの対象とノエーシスの対象が共にアイデアであるという要求と両者の間に似像と原物というような違いがあるという要求の両方を同時に満たしてくれるように思われる点に強みがある。しかし、まさにその点に、この解釈の根本的な困難もある。善のアイデアとの関連において見られたアイデアと善のアイデアとの関連において見られていないアイデアとが別々の対象であることについて、クロスとウズリーは次のように述べている⁽²¹⁾。

〔善のアイデアから〕 離れてバラバラに見られたアイデアは、善のアイデアとの関連・依存関係において見られた時の姿とは別の対象であると言っても過言ではない。

しかし、私は、過言であると思う。クロスとウズリーの言う「善のアイデアから離

れてバラバラに見られたアイデア」は、我々がそれを認識しない時に存在するであろうか。アイデアは、我々が認識していない時でも厳として存在する。そして、もしアイデアが善のアイデアを頂点とした相互連関を持つならば、アイデアはそのような連関の中で客観的に存在し、そうである以上、アイデアはそれぞれ唯一つしかないのだから善のアイデアから離れてバラバラには存在しない。従って、「善のアイデアから離れてバラバラに見られたアイデア」は、客観的存在ではありえない。それはアイデアの不完全・断片的な姿のことに他ならず、そのような姿は我々が認識していない時には存在しないので、対象とは言えずせいぜい精神の中にある認識の内容としか言えない。

この点をまとめると、クロスとウズリーの解釈は、まず知識の対象を一種類、アイデアだけであるとした上で、アイデアを認識するのに二種類の方法（数学的方法と哲学的方法）があるのでその結果得られるアイデアの認識にも二種類の認識（不完全な認識と完全な認識）があると考え、認識内容がこれら二種類あることからそれらに対応する二種類の対象があるとする。確かに、プラトンは、『国家』篇第五巻で、認識能力とそれが向けられる対象とそこから得られる認識との間に一对一の対応関係があり、従って得られた認識が異なればその認識対象も異なるという議論（477c1-478b2）を述べている。しかし、プラトンの議論は、認識する人の側に落ち度がありえないなどということの意味するものではなく、むしろ認識する人の認識能力が最高度に行使されることを前提していると思われる。そうであってこそ、ある認識能力によって得られた認識の限界は、その認識能力の向けられた対象に由来すると言えるからである。従って、認識の方法が対象との関係において不完全である場合、異なった方法から異なった認識が得られるからといって、それに対応する異なった対象があることは必ずしも帰結しない。むしろ、近代的な解釈にとっては、対象は一種類（アイデアだけ）、方法とそれによって得られる認識は二種類（ディアノイアとノエーシス）とする方が自然であろうと思われる。

(三)、クーパーおよびホワイトの解釈

クーパーおよびホワイトの解釈は、ディアノイア（従って数学）に固有の対象があるとは考えない。この解釈は、ディアノイアの対象がノエーシスの対象の「似像」であるということを、「推測」という意味で理解し、かつ線分の比喩の中二つの部分DCとECが同じ長さであることを重視してディアノイアの対象がピステイスの対象と同じ感覚的事物であるとする。この解釈によれば、ピステイスが感覚的事物を「盲信」し、またノエーシスがアイデアを直接認識するのに対して、ディアノイアは固有の対象を持たないので何か宙ぶらりんの状態にある。それは、感覚的事物を見てアイデアを「推測」する、または感覚的事物をアイデアの相の下に見ることである。これを数学の対象について言えば、思わくとは、目に見える図形や数だけを認めて数学的アイデアの存在を全く認めない状態であるのに対し、数学者は、数学的アイデアの存在には気が付いているがそれを直接見ることはせず、目に見える図形や数を見てそれを補助として用いて数学的アイデアのことを推測する。最後に哲学者は目に見える図形や数を補助として用いずに数学的アイデアを直接認識する。

クーパーおよびホワイトの解釈の第一の特徴は、線分の比喩の中二つの部分DCとCEが同じ長さであることに對して単刀直入な説明を与えることである。その説明とは、DCとCEが同じ対象を表すということであり、そこからホワイトは、ディアノイアの対象が感覚的事物であると主張する⁽²²⁾。しかし、線分の比喩におけるACとCBはそもそも思わくの対象と知識の対象という大きな区分を表していたので、CBの一部であるCE（ディアノイアの対象）が思わくの対象に属する感覚的事物を表すとは考えられない。

第二の特徴として、クーパーおよびホワイトの解釈は、ディアノイアの対象に関して曖昧な点があげられる。つまり、ディアノイアは、一方において感覚的事物を対象とするようにも思われ、他方においてアイデアを対象とするようにも思われる⁽²³⁾。そこで、クーパーおよびホワイトの解釈は、強調点を移して、ディアノイアは感覚的事物を補助として用いるが実際にはアイデアを対象とすると主張することが

できる。では、同じアイデアを対象としながら、ディアノイアとノエーシス、言い換えれば数学と哲学はどう違うのか。プラトンは、数学的方法と哲学的方法の違いを二点指摘している。まず第一に、数学者は紙に書かれた図形を似像として用いるが、哲学者は感覚的事物を補助として用いない。第二に、既にコーンフォードの解釈の所で述べたことであるが、数学者は数学の対象を仮設として前提しそこから導き出される結論を整合的に導き出すが、哲学者は仮設を更に遡りもはや仮設ではない善のアイデアにまで上っていく。これら二点は数学的方法と哲学的方法の違いであるが、単にそれにとどまらず、数学的对象についても語っていると思われる。例えば『国家』篇510c6-d1において、プラトンは、数学者が数学の対象を仮設として前提しその上には遡らないことを説明して、「数学者は数学の対象を既知のものとみなし——万人に明らかなものとする」と述べている。つまり数学の対象は、数学者が万人に明らかとみなすことができるような種類のものなのである。ところが、数学者は数学的アイデアを万人に明らかなものとみなすことができるであろうか。アイデアとは、多くの人にとっては非常に不透明なもの、その存在さえも認められないようなものなのである。従って、数学者といえども数学的アイデアを万人に明らかとはみなすことができないと思われる。とすれば、数学の対象は、数学的アイデアとは異なる。

更に、クーパーおよびホワイトの解釈は、数学的方法と哲学的方法の違いの中でも、数学者が書かれた図形を用いるのに対し哲学者はそうしないという点の方を中心に据えているように思われる。というのは、この解釈は、哲学とは感覚的事物を介さずにアイデアを直接認識することであり数学とは書かれた図形を通してアイデアを「推測」することであると、哲学と数学を媒介の有無によって規定するからである。しかし、数学が（数学的）アイデアを「推測」というのは、本当であろうか。プラトンは、数学のことを「実在について夢みている」（533b8-c1）状態と述べている。「実在」とはアイデアのことであり、「夢みている」とは似像のことを原物だと勘違いしている状態のことだとすれば、プラトンの言葉は、数学の対象が

アイデアとは別でありアイデアの似像であることを意味していると思われる。

以上の理由によって、クーパーおよびホワイトの解釈も、数学の対象についてのプラトンの考えを正確に表しているとは考えられない。

四、アイデア定立のための二つの議論

近代的解釈が正確にはプラトンの思想を反映していないとしても、だからといってすぐには伝統的解釈が正しいということにはならない。伝統的解釈の正しさを主張するためには、まず、伝統的解釈の困難とされた事柄に対して明確な説明を与えることが必要である。

恐らく、伝統的解釈にとって最も致命的と思われる箇所は510d5-8で、そこでは数学の論証が「四角形そのもの」「対角線そのもの」のために行われると述べられている。そして、この「何々そのもの」という言い方はアイデアを表す表現であると一般に考えられている。もしそうであれば、この箇所は、数学の対象が（数学的）アイデアであることを強く示唆するであろう。しかし、「何々そのもの」という言い方が常にアイデアを表すとは限らない。一般的に言って、「何々そのもの」という言い方は、似像と対比された原物をいう表現に過ぎないのであって、その原物が何であるかは決まっていない。今の場合も、数学の対象が「四角形そのもの」とか「対角線そのもの」とか呼ばれるのは、数学の対象が紙に書かれた図形との対比においてその図形の原物であることを述べているに過ぎず、その原物がアイデアであるか中間物であるかについては何も言われていない。従って、この箇所は、伝統的解釈に対する反証にはならない⁽²⁴⁾。

二つ目の箇所は511d1-2で、そこでは、数学者の認識はノエーシスではないが数学の対象は「ひとたび始原と関係づけられるならばノエーシスの対象になる」と言われている。確かにこの箇所は、数学の対象がノエーシスの対象と同じであること、同じアイデアが数学者によって数学的に認識される時ディアノイアの対象になり

哲学者によって哲学的に認識される時ノエーシスの対象になることを示唆する。しかし、もう少し注意深く読むならば、ディアノイアの対象とノエーシスの対象との間には似像と原物という関係があるので、この箇所は、似像と原物の共通性を述べているに過ぎないと読むこともできる。つまり、数学者が似像（例えば数学的四角形）だけを認識している事柄についてひとたび似像から原物（例えば四角形のイデア）へと目を向けかえるならば原物を認識することができる、という意味にも整合的に読むことができる。従って、この箇所も伝統的解釈の放棄を強要するものではない。

三つ目の箇所は534a5-8で、そこでは次のように言われている。

思わくの対象と知識の対象を、それぞれ二つに分割して、その間の比例関係を考えることは、グラウコン、やらないでおこう。そんなことをやり出すと、われわれは、いままでたどってきた議論よりも何倍も長い議論のなかに、巻きこまれることになるだろうからね。（『国家』篇534a5-8）

この箇所はしばしば、ディアノイアの対象とノエーシスの対象との区別が「自分[プラトン]の意図するところではない」⁽²⁵⁾という意味だと解釈される。しかし、この箇所を正確に読めば、ディアノイアの対象とノエーシスの対象との区別をプラトンが意図していないとは言えない。プラトンがやめようと言っているのは、その区別について議論することであり、この箇所は、むしろディアノイアの対象とノエーシスの対象との区別に言及しその区別の存在を認めていると思われるからである⁽²⁶⁾。

上の三箇所が伝統的解釈に不利だと思われた主な箇所であり、それらの箇所を伝統的解釈がどう読むことができるかを一応説明したので、次に伝統的解釈を積極的に擁護するために、『国家』篇の中にイデアを要請する二つの議論があることから、知識の対象にイデアと数学的中間物という二種類のものを区別することがプラトンのイデア論にとって全く自然な帰結であることを論じる。

二つの議論とは、いわゆる「多の上に立つ一（the one over the many）」とい

う議論と「相反する現われ (conflicting appearances, opposite qualities)」からの議論である。まず、「多の上に立つ一」という議論は、『国家』篇の第五卷 (475e9-476a8) や第六卷 (507b2-8) にも見られるが、最も明確な形では第一〇卷において次のように述べられる。

われわれは、われわれが同じ名前を適用するような多くのものを一まとめにして、その一組ごとにそれぞれ一つのアイデアというものを立てることにしている。(『国家』篇596a6-7)

この議論は、多くのものが同じ述語 (F) で呼ばれる時にそれらが等しく F であることの原因を一つの起源 (F) に求めその存在を要請するものである。

もう一つ「相反する現われ」からの議論は、第五卷 (479a5-e9) にも見られるが、より明確な形では第七卷において次のように述べられる。

感覚が同時に正反対のものを示すような場合——つまり感覚だけではあるものがこれである [例えば、大きい] とその反対である [小さい] ともいっこうに明らかにされないような場合——魂は知性を助けに呼んで——「大」とは、また「小」とは、そもそも何であるのか、という問いが起こる。(『国家』篇523b9-524c12)

そして、こうして知性によって問われるものが見られるもの (horaton) に対する知られるもの (noeton) だとされる。この議論は、見られるものが F と現れるだけではなく非 F と現れるのに対し、F であって決して非 F ではないようなものを知識の対象として要請するものである。第七卷の「相反する現われ」からの議論についてはその正確な意味に関して議論もあるので、ここでの理解を簡単に説明しておく。まず「F と非 F と現れる」という規定が当てはまるのは「大」や「小」といった比較語・関係語に限定されず、「指」その他のいわゆる実体を表すような名詞にも当てはまると考えられる。また、目に見えるものが F と現われかつ非 F と現れるのは広い意味で知覚のパースペクティブが異なるからであるが、パースペ

クティブには知覚者や見る視点や比較の対象と共に時間の要素も含まれる⁽²⁷⁾。従って引用文中の「同時に」という言葉は、時間上の同時というよりも非時間的に一緒にという意味に理解する。

ここで私が注意したいのは、これら二つの議論が論理的に独立だということである。従って、二つの議論の組合せとしては、「多の上に立つ一」という議論を使って「相反する現われ」からの議論を使わない場合⁽²⁸⁾、「多の上に立つ一」という議論を使わずに「相反する現われ」からの議論を使う場合、そして「多の上に立つ一」という議論と「相反する現われ」からの議論と両方を同時に使う場合という三つの場合が考えられる。第一の場合は、例えば、多くの肖像画がソクラテスの肖像画である時にソクラテスそのひとを想定するような場合である⁽²⁹⁾。この時、ソクラテスの肖像画が多くあるのに対してソクラテスそのひとは一人であるけれども、だからといってソクラテスが永遠不変ではないことは言うまでもない。このような関係は、思わくの世界の内部でも観察することができ、線分の比喩のADとDC即ち感覚的事物の似像と感覚的事物との関係がそれに当たる。第二の場合は、例えば、紙に書かれた目に見える図形で三角形と見えたものがまた三角形ではない（三角形の定義を正確には充たさない）とも見える⁽³⁰⁾のに対し、厳密に三角形の定義を充たすような対象を想定する場合である。この時、想定される三角形は、厳密に三角形の定義を充たせばよいのであって、数的に一つに限定される必要はない。正確に同じ完全な三角形がいくつあってもかまわないのである。但し、想定される完全な三角形は、目に見える対象（DC）ではありえず、知識の対象に属す。これこそ、数学的中間物（CE）である。また、上で引用された「相反する現われ」からの議論が置かれた文脈を考えれば、プラトンは、正確に数学の対象を導入するために「相反する現われ」からの議論を利用していると思われる。というのは『国家』篇第七巻において、数学は哲学のための予備教育として位置づけられ、「相反する現われ」からの議論は、数学が現象の世界（DC）から知識の世界（CE）への魂の決定的な転回を促すことを説明するものだからである⁽³¹⁾。第三の場合は、普通に個

物 (DC) とアイデア (EB) の関係として理解されているものである⁽³²⁾。つまり、多くのものがFであり非Fでもある時に、Fであって決して非Fではないような対象を唯一つ想定するのである。これは、「相反する現われ」からの議論によって生まれた多くの完全なF（たとえば、三角形）に対してもう一度「多の上に立つ」という議論を適用したものと考えることもできる。このように見てくれば、数学的中間物が「多の上に立つ」という議論を伴わない「相反する現われ」からの議論の適用によって生まれるものであることは、明白であろう。そして、「多の上に立つ」という議論と「相反する現われ」からの議論とが独立である以上、そのような数学的中間物の存在はアイデア要請の議論の構造に本質的に属するのである⁽³³⁾。

従って、プラトンは『国家』篇の中で数学の対象として数学的中間物を考えた、しかもアイデアよりも下位にある知識の対象として考えた、と私は考える。

注

- (1) Wilson, 249-50. 但し、プラトンのアイデア論を単純に普遍理論と理解することには、私は同意しがたい。プラトンのアイデアを不注意に普遍だとすると、アイデアの自己述定性（Fのアイデアがそれ自身Fであること）が理解できなくなる可能性があるからである。
- (2) 数学的中間物については少し後で論じるが、詳しくはアリストテレス『形而上学』特に第一巻六章九章および第一三巻六～七章を参照。
- (3) 数学の対象についての考えが後期のプラトンではどうか、また対話編ではなくいわゆる「書かれざる教説」ではどうか、という問題については、別に考察を要するであろうが、今の私にはそこまで考察を広げる力がない。但し、後期対話編とされる『ピレボス』については、基本的に『国家』篇と同じ見方が述べられているように思われる。
- (4) 伝統的な解釈を取る主な解釈者はアダムとハーディーであり、他にブレントリンガー、シナイコ、レイヴン、（ガスリー、アンナス）、バーニエツトも伝統的な解釈に属すと思われる。但し、ガスリーとアンナスの解釈は数学の対象に関して曖昧であり、数学的中間物が線分の比喻では認められていないが『国家』篇第七巻では認められていると考える。Cf. Guthrie, 523, and Annas, "On the 'Inter-mideates'," 160-64, and *An Introduction to Plato's Republic*, 251.
- (5) ウィルソン、コーンフォード、ロビンソン、クロスとウヅリー、（ガスリー、アンナス）等が、この解釈を取る。また、クーパーおよびホワイトは、後で論じるよ

うに、DCとCEが同じ長さであることを重要視した非常に特異な解釈を取る人達であるが、近代的な解釈に含めることができると思う。

- (6) この呼び方は、ブレントリンガーに倣う。Cf. Brentlinger, 148.
- (7) シナイコ、レイヴン、クーパー、ガスリー、ホワイト等が、この見方をする。ノエーシスとディアノイアは単に認識の方法が違うだけであって同じ対象に関わると考える解釈者にとっては、ディアノイアの範囲を数学に限定しないこの見方はごく自然であろう。シナイコとレイヴンは、数学の対象以外にも中間物を認める解釈を取っている。例えばシナイコの解釈によれば、ほとんどすべての経験科学は一般的な言葉によって科学の対象を仮定しその対象について発見した法則を経験的データに照らして証明するが、法則が関わる科学の対象は感覚的個物でもアイデアでもない中間物である。例えば、医学において「人間には肺が二つある」と言えば、「肺」が二つあることは明白であるし、伝染病や内臓移植も複数の「人間」を想定しなければやはり語れないであろう。Cf. Sinaiko, 159-60, and Raven, 156-9.
- (8) エイカシアという言葉のこの曖昧さは、一般によく知られた点である。Cf. Cross & Woosley, 218-20, and Robinson, 190-91.
- (9) この問題については、後でクーパーおよびホワイトの解釈を検討・批判する際に論じるが、そこで私は、数学者は数学の対象を「盲信」という解釈を取る。
- (10) アリストテレス『形而上学』からの引用は、岩波文庫の出隆訳を参考にし、必要に応じて若干の変更を加えた。
- (11) それに対して、数学的なアイデア（例えば3のアイデア）は、加算可能的でないとされる。数学的な数が相互に相等しい単位から成り立つのに対し、数的なアイデアはそれぞれ不可分単純であり、更に例えば3のアイデアは「2のアイデアの後、4のアイデアの前」といった前後関係によって規定される（アリストテレス『形而上学』1080a17-18, a33-5, b11-14参照）ので、時代錯誤の謗りを覚悟で敢えて想像力を逞しくすれば、数学的な数と数的なアイデアとをラッセルの基数概念とベナセラフの序数概念に対応させることができるかもしれない。ラッセルの第二章およびBenacerrafを参照。
- (12) プラトン『国家』篇からの引用は、岩波文庫の藤沢令夫訳を参考にし、必要に応じて若干の変更を加えた。
- (13) すぐ上の引用において1が複数個存在することが前提されていると思われる点を例外として。
- (14) Cornford, 62.
- (15) Cornford, 63.
- (16) Cornford, 63-7.
- (17) Cornford, 73.
- (18) Cornford, 62-3.
- (19) Cross & Woosley, 230, 232.
- (20) Cross & Woosley, 238.

- (21) Cross & Woosley, 238.
- (22) White, *A Companion to Plato's Republic*, 185-6.
- (23) Cf. White, *Plato on Knowledge and Reality*, 111, note 38.
- (24) Cf. Burnyeat, 219-20, note 19.
- (25) 藤沢、四二頁。
- (26) Cf. Brentlinger, 161.
- (27) 時間の要素については、『国家』篇479a1-8および『饗宴』211a1-5を参照。今朝美しかった朝顔が夕べにはもう美しくないというような例が考えられる。
- (28) 「多の上に立つ一」という議論は、「相反する現われ」からの議論を内に含んでいると思われるかもしれない。というのは、もしそうでなければ、つまり「多」の中に一つでも決して非FでないようなFが含まれていれば、起源としての一つのFを「多の上」に想定する必要はなく「多の中にある一」でもよさそうなものだからである。しかし、第三人間論が示しているように、たとえ「多」の中に決して非FでないようなFが含まれていても、依然として「多の上に立つ一」という議論は起源としての一つのFを「多の上」に要求するので、この議論は「相反する現われ」からの議論を前提として必要とはしない。
- (29) ここでは、「相反する現われ」からの議論が効かないような例を意図的に選んである。ソクラテスがアイデアでないことは言うまでもない（ソクラテスのアイデアが存在しないことはほぼ確かであろう）。ソクラテス自身1つの現われでありまもなく消え去る運命にあるからである。ソクラテスの肖像画がソクラテス（F）と見えるだけではなくまたソクラテスではない（非F）ともみえるように、プラトンにソクラテスと見えた（F）もの（ソクラテスその人）もまたアリストテレスにはもはやソクラテスとは見えない（非F）。
- (30) 三角形（F）と見えたものがまた三角形ではない（非F）とも見える。また、世界に目で見える三角形が唯一つしかなくても、それを見た人が三角形が何であるかを理解することが充分可能であることから解るように、この例では紙に書かれた三角形は複数個ある必要はない。
- (31) それに対し、第五巻での「相反する現われ」からの議論は、「多の上に立つ一」という議論と一緒に利用されており、従ってそこでは数学的中間物ではなくアイデアが要請される。
- (32) 従って、正確には、「多の上に立つ一」という議論と「相反する現われ」からの議論はそれぞれ単独でアイデアを要請するものではなく、二つの議論が一緒になってアイデアを要請する。但し、二つの議論を論理的に厳密に区別しない場合には、しばしばそれぞれの議論がアイデアを要請すると（もう一方の議論を暗黙の内に了解しておいて）理解されている。この節の題を「アイデア定立のための二つの議論」としたのもそのような意味においてである。
- (33) 数学的対中間物を要請する議論に着目した論文として、アンナスの“On the Intermediates”がある。しかし残念なことに、アンナスはプラトンの数学的中間

物を要請する議論をアイデアを要請する議論との関連において見ていない、従って「多の上に立つ」という議論がこの論文においてアンナスの視野に入っていない。

参考文献

- 藤沢令夫、「問題の所在——上山春平氏への返信」『古代哲学研究』第二号（一九六九年）、三九～四五頁
- ラッセル、『数理哲学入門』（中村秀吉訳）、世界の大思想第二六巻、河出書房、一九六六年
- Adam, J. *The Republic of Plato*. 2d ed. 2 vols. Cambridge: Cambridge University Press, 1963.
- Annas, Julia. "On the 'Intermediates'." *Archiv für Geschichte der Philosophie* 57 (1975): 146-66.
- . *An Introduction to Plato's Republic*. Oxford: Oxford University Press, 1981.
- Benacerraf, Paul. "What Numbers Could Not Be." *Philosophical Review* 74 (1965): 47-73. Reprinted in *Philosophy of Mathematics*, edited by P. Benacerraf & H. Putnam, 272-94. 2d ed. Cambridge: Cambridge University Press, 1983.
- Brentlinger, J. A. "The Divided Line and Plato's Theory of Intermediates." *Phronesis* 8 (1963): 146-66.
- Burnyeat, M. F. "Platonism and Mathematics: A Prelude to Discussion." In *Mathematik und Metaphysik bei Aristoteles*, edited by A. Graeser, 213-40. Bern: Stuttgartarhaupt, 1987.
- Cooper, Neil. "The Importance of *dianoia* in Plato's Theory of Forms." *Classical Quarterly* 16 (1966): 65-9.
- Cornford, F. M. "Mathematics and Dialectic in the *Republic* VI-VII." In *Studies in Plato's Metaphysics*, edited by R. E. Allen, 61-95. London: Routledge and Kegan Paul, 1965.
- Cross, R. C. and Woosley, A. D. *Plato's Republic: A Philosophical Commentary*. New York: Macmillan Press, 1964.
- Guthrie, W. K. C. *History of Greek Philosophy*, vol. IV. Cambridge: Cambridge University Press, 1975.
- Hardie, W. F. R. *A Study in Plato*. Oxford: Oxford University Press, 1936.
- Raven, J. *Plato's Thought in the Making*. Cambridge: Cambridge University Press, 1965.
- Robinson, R. *Plato's Earlier Dialectic*. Oxford: Oxford University Press, 1953.

Kozi Asano, Sep. 1995

Sinaiko, H. L. *Love, Knowledge, and Discourse in Plato*. Chicago: University of Chicago Press, 1965.

White, N. P. *Plato on Knowledge and Reality*. Indianapolis: Hackett Publishing, 1976.

———. *A Companion to Plato's Republic*. Indianapolis: Hackett Publishing, 1979.

Wilson, J. C. "On the Platonist Doctrine of the *asymblētoi arithmoi*." *Classical Review* 18 (1904): 247-60.

(あさの こうじ・阪南大学非常勤講師)

(付記 本論文は、東北大学哲学研究会『思索』第28号(1995年)、103～125頁で発表したものである。)